

めぐみいせき 目久美遺跡 (市指定史跡)

昭和8年(1933)、加茂川放水路(現加茂川)の開削時に地元かきくじ じもとの清水安造氏によって発見され、その後の数回の発掘調査によって縄文時代と弥生時代の山陰の代表的な低湿地遺跡です。遺跡は米子市目久美町の足尾山の山裾一帯の水田の地下1~4mに埋れている縄文時代前期(6千年前)から弥生時代前期(2千3百年前)に営まれた村跡や水田跡です。

縄文時代の遺跡は、この辺りまで海が入り込んでいたことを示し、当時の海辺に住んだ人たちが使用した縄文土器のほか、石器や動物の骨や魚骨が大量に出土しました。また、ドングリを蓄えていた穴も43基見つかり、植物の採取と狩や漁を行って暮らしていた様子を物語ります。

弥生時代には、山裾の微高地に村を営み稲作を行って暮らしていたらしく、村跡と水田跡が発見されています。水田は小さな区画ですが畦や水路も整備された立派な田です。弥生土器や石器のほかには鍬や鋤、田下駄などの農耕具も多数発見されており、当時のこの地域の農耕文化を具体的に物語っています。



弥生時代の小さい区画の水田跡



田面の足跡



縄文時代のドングリの貯蔵穴



鹿の角で作った鷺口